

- 第3章 -

【 学習 】

俺の疲れ切った目に、更に追い討ちをかけるかの如く、燦々と晴れ渡る太陽の光が差し込んでくる。

だんだんと差し込んだ光によって意識がゆっくりと覚醒してきた。
「...ん.....朝...か。」

まだ夏の暑さが残る中、家の外ではミンミンゼミが一生懸命に、文字通り自分の命を賭して鳴いていた。

眠い目を擦る力もない。
ベッドからなかなか起き上がれずにいた俺は、完全に開けられない目がうっとうしくて顔をしかめた。

「うわ。こんな時間まで寝てたのか。」
ふと枕元に転がっていたスマホに目をやり時間を確認する。

もうお昼の12時を回っていた。
今日は仕事がないから良いものの、もし仕事があったら完全に遅刻だったな...

家の隣の大きめの公園からは野球少年たちの気合の入った元気な声が聞こえてくる。

身体が言うことを聞かない。
「そう言えば、昨日...」
自分の布団にくるまりながら昨日の出来事を思い出す。

「君は最低だ。だけどそうやって自分が最低なことに気がついて、君はそこから最高に成長するんだ。」

あいつから言われたその言葉が妙に頭に残っている。

このすれ違いの失恋こそが改善をしなくてはいけない恋愛とあいつは言った。
そして続けてこうも言っていた。
「その状態こそが唯一の自分が改善する事で修復できる失恋。そして自分の経験値になる恋愛だよ。」と。
俺の...経験になる恋愛...か。

「俺はこれで良かったのか...？」

昨日、俺は彼女に対する今までの自分の行いを初めて思い返して死ぬほど悔いていた。
そう、俺なんかと付き合わなかった方が相手は幸せなんじゃないかと思うほどに。
無かったことにした方が良いんじゃないかとも思った。
だけど、そんな気持ちもあいつの言った言葉に救われた気がした。

俺の成長か...

確かに。
自分の今までの最低な行いに気が付いたからこそ、俺は後悔した。
そしてもう2度と同じ過ちは犯したくないと思った。

「今までの俺の恋愛はちゃんと意味があった...のか？」

...今は自分だけで考えても分からない。
昨日、俺たちは話し込んでいるうちにすっかり辺りも暗くなっていた為、そのまま解散してまた今日の夕方に集まることにした。

とにかく今日もあの公園に行くか...

ただ"これ"だけは今やっておかないとダメだ。
俺の毎日の朝のルーティンになっている。仕事の日でも"これ"をしなければ朝から調子が出ない。
だから本調子を出すためにその行動に着手した。
そう。俺は本日、二回目の眠りに着いた。

周囲からは光が満ち溢れて活気付いているのに、この部屋だけが世間から取り残された様に暗い感じがする。
いや、俺が暗くしているのか...？

でもそんな俺にもやっと、昨日一筋の光が差し込んできた。

...あいつには感謝...しなきゃ...なのかな。

*

セミたちの鳴き声が変わっていく。
「カナカナカナ」
ひぐらしが鳴き出した頃、俺は公園まで走っていた。

公園の柵を飛び越えそのまま道なり一直線に走る。
昨日と同じ階段の前に、背の高いスラっとした影が一つ。

「はあはあはあ...すまん!!遅れた！」

「ああ。僕も今来たところさ。」

今日も笑顔で羨ましいくらいの整った顔。
そしてその背景には綺麗なリアス式海岸。
その水平線の向こうに美しい夕焼け。
何かの絵になるんじゃないかと思う場面。
...うつ。
くそっなんだか急にムカついてきた...
朝思った感情はすっかりどこかに消え失せてしまったな。

「さあ今日も始めようか。君の成長までの物語をね。」

「ん？...ああ。」

返事を返し、自分の考えを頭に巡らせる。
ふと今日のお昼に自分が思った疑問が頭を過ぎる。

「なあ。俺はあんな恋愛をして本当に意味があったのか...？」

「意味...ね...」

俺から視線を外して海辺の方を見た。

「意味は君が作っていくんだ。これからね。」

「俺が？」

「そう。君が今までの失恋に意味があると思って、意味のある行動を取ればその恋愛には意味があったんだと僕は思うよ。」

「意味のある行動...」

後悔したことに対してどう行動していくかで、その意味が変わるってことか...。つまりどう意味を付けるのは自分...

「じゃあ、今日は昨日の続きだね。」

意味をつける為にも、自分がちゃんと考えていかなければならない。
決心を決めなきゃいけない。

「...ああ。頼む。」

神妙な面持ちで頷く。

「これから君は”恋人を作る上での覚悟”を知らなければならない。」

「恋人を作る上での...覚悟？」

「ああ。これから作る彼女にしろ、今までの彼女と復縁するにしろ、その相手とのお付き合いをしていく前の考え方のことさ。」

付き合う前の考え方...？

一体どう言うことだ？

「例えば、これから野球をしたい人がルールを一切知らずに見様見真似でやっていたら、それは野球として成立すると思うかい？」

見様見真似...？

やったことがない人が、見ただけで野球を...？

「...いや、それは野球じゃなくなる...と思う。

サッカーにしろ野球にしろちゃんとしたルールがあって、それに従っていくことでそのスポーツが成立するから。」

「そうだよね。何も知らずにただ野球ボールを投げていたら、それは野球という球技ではなく、ただのボール投げという遊びになってしまう。
恋愛においても同じだよ。」

「...恋愛でもルールのようなものがあるってことか？」

「その通りだよ。人付き合いをしていく上でも、教えられていない暗黙のルールのようなものがあったりするだろう？」

「確かに、そうだな...。」

そういえば、営業の仕事でも新人の頃はお客様との人付き合いの仕方を教えられていたな。

「うん。ただ人間関係を良好にしていく上では、野球のように詳しいルールは決まっていないんだ。友人との人間関係に決まったルールはないだろう？」

「なるほど。友達とのルールはないな。」

「だけど、ちゃんと人間関係を壊さない様に気をつけていることもあるだろう？」

そうだな...。

友達と関わりを保っていく上で無意識に気を付けてることか...

「その気をつけていることをちゃんと意識していかなければどうなると思う？」

相手の話を一切聞かずに、自分のことばかりを話す人は必然的に嫌われていくし、愚痴ばかり言う人も然り。

そうなれば、君の前から友人が去っていくのは必然だと思うだろう？」

「たしかに...」

「じゃあこれから君の気になる人が君の目の前に現れたとして...

君が恋人との関わり方のルールを知らなかったら、また同じ過ちを犯してしまうのは必然だと思わないかい？」

「そう...だな...」

ルールは知っておいた方がいい。

それは分かる。

でも...なんかしっくりこない。

うーん...

「そんな...相手との関わり方って自然と身につくと思うんだが、教えてもらってまで知るべきことなのか？」

「絶対に知るべきだよ。今までの君の失敗を考えれば一目瞭然じゃないかい？」

「う...」

俺の今までの失敗...

事実。俺は今まで散々振られた...

多分今の俺の考え方じゃ、また同じ失敗を繰り返して、また振られるかもしれない...。それははっきりとわかる。

「ちなみに相手との関わり方のルールを知っていれば、相手が女性に限らずどんな人でも使える。」

「どんな人でも？」

「ああ。人付き合いをしていく上で必要な考え方だから、今まで以上に友人との関係を良好にできたり会社での同僚然り、そのお客様。更には家族間の関係を良くすることもできる。」

友人から...家族まで？
関係をよくできる？

「なぜなら、今までの君は人間関係を見様見真似ルールでしかやったことない状態だったからさ。これを知ることができれば、これから生きていく様々なところで応用が効くはずだよ。」

見様見真似...

「...なるほど.....な。」

俺の...

いままでは恋愛になっていなかった...ってことか。

「ふふ。大丈夫。これからルールを知って、しっかりした野球にしていけばいいんだ。イチローでも最初は初心者だったんだよ。」

そう言うとまた昨日と同じノートを取り出して、昨日書いた恋愛における4つの失恋項目の下に書き加えた。

【お付き合いをする前の考え方】

- ①付き合う前に頑張りすぎない。
 - ②下心から始めた恋は続かない。
 - ③付き合うまでが目的にならないようにする。
 - ④価値観の相性を大切にする。
 - ⑤理想を押し付けない。
-

うーん...
いろいろあるな...。

「じゃあ昨日と変わって、1つの項目ごとに詳しく説明をしていくよ。」

「...ああ。わかった。」

「まず①の付き合う前に頑張りすぎないこと。
これは主に付き合う前の見栄のことだね。」

「見栄？」

「そう。君だって好きな女性の前じゃカッコつけたいと思うだろう？」

「ああ。そりゃある程度は頑張りたいと思うな。」

「その頑張りたいと思うことが過度に出過ぎて、やりすぎちゃうことがあるんだ。」

付き合う前にやりすぎ...？

「例えば、毎回のデートで無理して自分の収入に見合っていないレストランに行ってしまったら、相手と会う時だけ普段と違う自分を演じたり...
つまり相手から見た自分の評価を過大にさせてしまうことだね。」

「...なるほど。」

結構やっていたな...

女性の手前、良い金額の焼肉とか寿司を無理して奢っていた...

しかも毎回。

その時は良いと思ってしまいが、後々、見栄を張り過ぎてしまったと後悔する時もある

...

「それをやってしまうと付き合った後ギャップができてしまうんだ。」

ギャップ...ね...

「つまり付き合う前に自分を無理して繕いすぎているということさ。

そしてその無理は次第に付き合っていくにつれて、維持ができなくなっていき、付き合っていくこと自体が大変になってきてしまうんだ。」

「.....」

確かに...

いや、これ身に覚え...しかない。

「長く付き合うと言う事は、その人の自然体を見せることが必須な条件なんだ。人間なんだから無理はずっとはできない。長く一緒に居れば、どうしても自然体になってしまう時は絶対にある。

多少の無理ならまだしも、無理をしすぎている状態が続くはずはない。

君もそう思うだろう？」

「え！？あ、ああ！そ...そうだな...!!」

凶星すぎて言葉がたじたじになってしまってる！

絶対にバレている....。

「成る程ね。」

ふふっと笑った顔はやはり楽しそうにしている。

く.....結構恥ずかしい...

「そしてこの無理は女性以外の人間関係でも影響してくるんだ。

まあ仕事上の付き合いならまだ成立はするけど、友達になってくるとかなり難しくなってくる。」

「そうなのか...？」

「だってもしも君が僕と会う度に何かを無理していたら、僕と会うことがしんどくなってくるだろう？

友達として会うなら自然体が一番楽しいし、心地が良いんだよ。」

「...確かに。それはそうだな。」

...うん。この話している今の時間。

.....実は結構心地良い。

俺は自分の為にこの場所に来て話を聞いている。

自分の勉強だ。

今までの良くなかった恋愛を改善して、俺が幸せになる為に。

でも...自分では気が付いていなかったが、こいつと話をしに来てもあるのかも...？

俺が一番自然体で居れるこの時間を楽しんで...いる...？

「じゃあ次は②の下心から始めた恋は続かないことだね。」

！？

その言葉にハッとした。

「まあ。うん...そりゃあそうだろうと俺も思うかな。」

「うん。これは皆わかっているかもしれない。

けど、わかっているようでわかっていない人も実はいるんだ。」

「え？実はわかってない？どう言うことだ？」

「うん。お酒の席で酔った勢いだったりノリで始まる恋もあるだろう？

それらも下心になるからさ。」

「酒が回っている時か...

確かに...酒に酔って頭が回ってない時は、正直誰でも良いと思う時もあるな。」

「そうなんだ。頭が回っていない状態で人間は正確な判断ができない。

その時の楽しさや勢いで好きだと思ってしまったり。

そして酔った時、女性はフェロモンが出る。それに魅了されて、より妖艶で魅力的に見える時もあるからね。

そう言う勢いで付き合った場合は大抵1ヶ月後にはこんなはずじゃなかったと思うはずだよ。」

お酒の席で女性が魅力的に見えるあの現象は、人間の神秘的な不思議な力が働いていたんだな...。
...俺も気をつけなきゃだな。

「さらに性欲が高まっている時も要注意。
自分の中でその行為が目的になっていないと思ってもね。
自分のこの意思に嘘を付いている人もいるくらいだし。」

「自分の意思に嘘？」

「そう。自分は性欲が高くないと思い込むことだよ。
本当は頭の中はそのことでいっぱいなのにな。」

「なるほど。」

「そうやって嘘をついていると更にそのことで頭がいっぱいになってしまう。人間は面白いことに、何かを辞めようと思えば思うほど、その事で頭が埋め尽くされて更にやりたくなってしまう。
依存のメカニズムにもなっている事だね。」

確かに...
辞めたいと思えば思うほど辞められない事...あるな。

「そしてこれは人間の本能による反射だから、中々気が付きづらいしかなり厄介なんだ。」

また本能か。
わかっているようでわかってなかった言葉だ。
だから昨日、家に帰ってから自分のスマホで検索して”本能”の意味を調べていた。
簡単にまとめるとこうだ。
人間の植え付けられた先天的な意思で、自分の理性でも反応が出来ないもの...。
つまり抗えない反応。

「だから行為の前も、目の前の女性が普段以上に可愛く魅力的に見えてしまう場合がある。
その行為をしたいが為に付き合ってしまう、気がついた時には顔も中身も全然好きじゃなかったと言う現象が起こってしまうんだ。
その前はちゃんと好きだと思っていたはずなのにな。」

「なるほど。本能による勘違い...みたいなもんか。」

「そうだね。それで付き合ってしまったが最後。
相手のことはそんなに好きじゃないけど、付き合っちゃったしという情みtainなもので
ダラダラと無駄な関係が続けちゃうんだ。
そんなことは相手にとっても自分にとっても良くないし、なによりお互いの時間が無駄
になってしまう。
絶対に避けるべき行為だよ。」

ここで初めて昨日からの笑顔が崩れた気がする。
真面目な顔で海辺の落ちていく夕日の一点を真剣に見ていた。
まさか...経験が...ある...?
いやいやこいつに限って...そんな...

「必ず別れることになるからさ...。
そもそも付き合う前に”この人を大切にしよう”と言う覚悟がないんだからね。だから1
番大切なのは正常な思考ができる時に、ちゃんも考えてから決めることなんだ。
もう一度、本当に心から好きなのか、この人と付き合って本当に大切にできるのかっ
てね...。」

ここまで話してハッと気がついたような表情をしてまた元の笑顔に戻った。

「ああ...。ごめんごめん。
僕は行為そのものじゃないんだけどね。
相手が可哀想と思った同情で付き合ってしまったことがあってね。母性本能ならぬ父
性本能かな？ははは。」

顔では笑っているが、声が笑えてない...
「だから同情で付き合ってしまうと相手をもものすごく傷付けることになるんだ...。」

同情か...
こいつでさえも本能に負けたってことか...？

「じゃあ次に行こうか。
③の付き合うまでが目的と言う話は昨日も少し話をしたね。」

「...ああ。そうだな...」
今は相手の心配をしている場合じゃない。
自分のことを考えなくちゃな...

「それは少し聞いた。でもなんで付き合うまでが目的になっちゃうんだ？

付き合いたいと思っているなら、その後も一緒に居たいと思ったりしないのか？」

「うん。付き合うだけになってしまう原因は付き合うまでのプロセスや道のりの方が高揚感を得やすいからなんだ。」

「...うーん。付き合うまでの方が盛り上がる人とか...？」

「正解だよ。交際するまでが、ある種ゲームの様に感じてしまうんだよ。君は魔王を倒すことが目的のゲームはやったことはあるだろう？」

「そりゃあるぜ。
ドラク...」

「じゃあ魔王を倒してその後の平和な日常を過ごすゲームはどうだい？」

「魔王を倒したその後を過ごすゲーム？
そんなゲームあるのか？ていうか楽しいのかそれ？」

「そう。その感覚だよ。
ゲームとしては魔王をどうやって倒すかが求められているわけで、平和な日常を送ることを求めているわけじゃない。」

「そうだな。」

「ゲームの中の勇者は平和な日常を過ごすことが目的なのにね。
でもプレイヤーとしては魔王を倒して平和を手に入れるまでの間、レベルを上げたり強い武器を手に入れたり、仲間を育成して四天王を倒したり...
つまり魔王を倒してクリアするまでが楽しいんだ。
だからゲームをプレイする。何度もやり直したりしてね。」

「なるほど。手に入れた。クリアした。という感覚か...」

「うん。その通りだよ。
この手に入れたという感覚は付き合うことでも同じなんだ。
付き合うまでの攻略が楽しいから一生懸命になる。
でもいざ付き合ってしまうと、失恋に一直線になってしまう。
相手との付き合うという目的が違うんだからね。」

目的が違う...
付き合っていくのが目的と付き合うのが目的か...。

一昨日までの俺だったらこんがらがって良くわからなかったかもな…。

「そしてなにより、この感覚に本人が自覚していないで付き合ってしまう場合が一番の注意事項なんだよ。」

「自覚していない？
そんなこと…あるのか？」

いや……あ…

自分の思い当たるものを思い出そうとした瞬間に思い当たってしまった。
「…昨日までの俺みたいな感じか。」
恐らくその時の俺は鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしていたんだろうな。

「うん。厳密には違うけど、自覚していないで相手を傷つけてしまうことに関してはほぼ同じことだね。
本人は付き合いたいと言う欲求は変わらないからね。その付き合うまでのプロセスの為に付き合っているなんて思いもしないんだ。」

「なるほどな…。
でも付き合うためだけに付き合ってるなんて…
俺みたいに気がつかない人はずっと気がつかないんじゃないか？
何か克服する方法はないのかよ？」

「そうだね。この考え方の克服方法の一つ。
この人とこの先の人生もずっと一緒にいたいかを真剣に考えることしかないね。嫌なことや辛いことがあったとしても、この人と人生を共にできるかを考えるんだ。」

人生を共にか…
俺自身もそこまで考えてお付き合いをしたことはなかったな…。
相手との先のことをよく考える。
うん。今後の教訓にさせてもらおう。

「うんうん。教訓にする事はとても良い事だと思うよ。」

「！？」

は！？
今の言葉に出してなかったよな！？
なんでこいつ俺の考えていることがわかるんだ！？

「なんでかって？君は考えていることが顔に全部出ているんだよ。」
ふふふっと笑った笑顔がより一層楽しそうに見える。

「俺の顔！？
そんなに分かりやすいのか！！？」

「うん。ものすごく分かりやすいよ(笑)
じゃあその勢いで次の価値観の相性に行こうか」

わかりやす...！？
なんだか、俺の全部を見透かされている様でとても恥ずかしくなった...

こいつはまだ変わらずニヤニヤしている。
だが発する言葉のトーンは真剣に切り替えてある。

「君には価値観の相性の大切さをこれから学んでもらうよ。」

「お...おう」

切り替えがすごいな...。
そんな関心をしつつ俺も真剣モードにまた切り替えていく。

「お付き合いをしていく上でどんな人だったとしても価値観の相性はとても大事な
こと。これは分かるかな？」

「うん...まあ何となくは...」

「それが何故かと言うと、価値観が極端に違う人同士は一緒にいても根本の考え方が
合わないから、お互いに辛い思いをしてしまうんだ。だからお互いの考えていること
も分からない。」

「なるほど。」

「そして相手の考えていることが全く理解できずに、そのままで一緒に居ると衝突が増
える。衝突をしない場合でも片方が我慢して、ストレスを必要以上に溜めていること
もある。
とにかく価値観の相違は付き合っていく上で障害でしかない。」

「うーん...考え方が合わない人と一緒にはいられないってことだな。」

「その通り。具体的にはお金の感覚、料理の味付けや好きなもの、嫌いなもの、あとは物事に対する考え方とかだね。」

「金銭感覚のズレはとても辛って友人から聞いたことがある。」

「そうだね。どんなにお金を持っても、常にお金を節約しながら生活している人と、節約なんてそっちのけで自分の好きなように使うことがライフスタイルになっている人は一緒にいけない。」

「そんなカップルは一緒にいたら別れるか喧嘩になると思わないかい？」

「ああ。絶対に喧嘩になると思う。」

「うん...箸を使って食事をするのが普通になっている僕たちにとって、手を使って食事をする文化は受け入れ難いよね？」

「極端な話だけど、考え方って人によって本当に千差万別。全く同じ環境で生きてきた双子の兄弟だって考え方が違うんだから、この相性っていうのはすごく大切にしなければいけないんだ。」

価値観の相性が...

俺も昔やらかしたことがある。

一時期、洋服にハマってしまったことがあり、革ジャンに何十万と使っていた。

その当時、付き合っていた彼女には理解されないお金の使い方だったらしく、そんなお金があればもっとデートに使って欲しいと言われた。

そう。デートは節約ばかりで行くところもほとんど、どちらかの家しか行ったことなかった。

外に遊びに行くことは極偶に。そうなれば、絶対にお弁当を持参していく。それが恥ずかしいと言われた。

俺からしたら、外食よりも手作りの弁当の方が喜んでくれると思っていた。

趣味に使うお金以外は全部最低限に済ませてしまいたいと思って極貧生活を普通に送っていた。

そして何より趣味のお金なんだから俺の好きにさせて欲しいと思っていた。

相手からしたら俺の何もかもが理解できない様だった。

その価値観のずれが積もりに積もって喧嘩した後、結局別れてしまった。

だが俺もふとした時に洋服に何十万も掛けていたこだわりがバカらしくなって、コレクションの服をスッパリと全て売ってしまった。
同時に普通に送っていた極貧生活も何の為に分らなくなってしまい辞めたんだ。

この感覚に戻るのがもう少し早ければ...
...なんだか、苦い思い出だ.....。

「そして最後には理想を押し付けないということだね。
もう君もここまでくれば、これがいかに良くないことなのかわかるよね？」

「ああ。理想を相手に押し付けるのは違う。理由ははっきりと答えられないけど、これだけはわかるよ。」

「そうだね。」
ニコッと笑いそのまま続けた。
「理想を押し付けるということは相手に期待をすること。」

期待...。

「期待はね...期待をしている自分にとっても、期待をされている相手にとっても辛い結果になってしまうんだ。」

なるほど...
...え一つと.....
期待をしているということは...
「...自分の思い通りにならない...こと？」
そして、期待をされているってことは...
「...自分の考え方をできない...ことか？」
だから
「それは...つまり両方ともがストレスを抱えていて辛い状態だ！どうだ？違うか？」

「すごいね。その通りだよ。
理想を押し付けた側は、やがてその理想と現実の差が大きくなって相手にがっかりしてしまう。ストレスとも言うね。
理想を押し付けられた相手は、その人なりの考え方があるのに相手から考えを押し付けられて、自分の考えを否定されたように感じてうんざりしてしまう。」

なるほど。わかりやすい。

「これは親子の関係でよく起こりがちでもあるね。」

親子か...

親が自分の理想を子供に押し付けて、子供の考え方や自由を奪ってしまうって以前テレビでやってた気がする。

「ちなみによくカップルがやりがちなのはネガティブフィードバックだよ。

相手が自分の思い通りにできてないと、その理想との差を相手に押し付けてしまうんだ。」

うわ...これは...

「例えば...自分の思い通りのファッションセンスじゃなかったり、彼女の化粧が好みじゃなかった時に、聞かれてもないのに口を出してしまうとかね。」

...

自分のやらかしたことと、やられたことが同時に来て、思わず顔を手で覆ってしまった。

「ははっ。これもか(笑)

君は色々な経験をしているね。」

「...これが良い経験かどうかわからないけどな...。」

「まあそれを活かすのは君次第さ。

そして付き合う前にこの5つの項目を知っているだけでも恋人作りから全然違うはずだよ。

付き合ってから大切な事はあるけど、付き合う前からもう恋愛は始まっているからね。」

なるほど。

うむ...

正直、恋人の作る前からこんなにも考えることがあるなんて知らなかった...

いや俺は知ろうとしてなかったのかもしれない。

こう言う考えってなんか面倒臭くて、考えても意味があるのか分からなかったから...

でも俺のそういう恋愛に対する覚悟の薄さが今回までの失恋を産む結果になった

.....

面倒臭くても大変でも、俺は考え続けて自分を成長させなきゃいけない。
本当に好きな人に振られるのは辛い。
もうこんなしんどい思いはしたくないから。

だから俺は絶対に変わってやるんだ。

*

じゃあ次だね。

次は付き合ってからの方考え方だよ？

これは本格的な恋人との愛の育み方のことだ。ここからが最も大切な部分と言っている。

君は付き合ってからマンネリ化って感じたことあるかい？
例えば...そう、好きな食べ物でも毎日食べていたら飽きちゃうだろ...？